

## 陽明学関係書 紹介と短評

### ○古川 治著『淵 岡山』（シリーズ陽明学・21）

平成十二年三月、明德出版社刊。B6版、254頁。

淵岡山については、井上哲次郎の『日本陽明学派の哲学』で、中江藤樹の門人として、熊沢蕃山とともに併称されているにしては、その人と思想については殆ど知られていない。というのも、これまで高瀬武次郎の「隠れたる陽明学者淵岡山先生」（『史林』二二一、大6）、柴田甚五郎の「藤樹学者淵岡山と其学派」（『帝国学士院紀要』一一一、一二三、四一一、昭17、18、21）の他は、『藤樹先生全集』の別冊があるのみで、近年、木村光徳著『日本陽明学派の研究―藤樹学派の思想とその資料』（昭和61年10月、明德出版社）によって全貌が明らかになったが、一般に啓蒙するものはなかった。

本書は、岡山の人と思想を知るのに恰好の書である。内容は次のような構成である。

〈解説〉一、淵岡山の生涯。二、思想内容。三、岡山の学問の影響。

〈本文〉一、岡山の示教録。『岡山先生示教録』巻一七、及び雄山照海の追加の文の解釈と解説。

二、岡山学の影響と展開。ここには、岡山学の地方における文書の解説と解釈。(1)大阪学派。(2)美作学

派。(3)伊勢学派。(4)江戸学派。(5)会津学派。(6)熊本学派。(7)江西(岡山)と熊沢蕃山。○「むすび」で著者古川氏は学説の要点のまとめをしている。

### ○望月高明著『池田草庵』（シリーズ陽明学・30）

平成十三年六月、明德出版社刊。B6版、223頁。

著者の池田草庵に対する立場は、呉康斎の亜流として把えるもので、それは長崎の崎門学派の儒者楠本碩水が、池田草庵のことを大橋訥庵から、「その人となりもまた康斎の流亜なり」と評された言葉に基づくものである。楠本碩水も池田草庵のひとりとなりを知りたいと思つて、但馬を訪れて、実感したことを『日録』に残している。

〈解説〉池田草庵については、既に過去の研究があつて、それに加えるものがないので、前記呉康斎の亜流としての草庵を、楠本碩水の言葉を中心に描いている。(但し、この内容は『陽明学』第11・12号に掲載した著者の「池田草庵―康斎の流亜」(上下)に基づいている)

〈本文〉(1)草庵の文から、康斎の亜流であることを見いだすための文と書簡。(2)満福寺出奔に関する文と語録。(3)読書講学に関する文と書簡。(林良斎、吉村秋陽、吉村斐山、楠本碩水宛)(4)黙坐修静に関する林良斎宛の書簡。ここには劉念台の「訟過法」や高忠憲の「復七規」などが余説として取り上げられている。

本書は、テーマにそつて選択された文や書簡の訳もさることな